

<b>Title</b>	スピリチュアルケア研究講演会 「心へのケアといやし：スピリチュアリーとは」 報告（2015年度 聖学院大学総合研究所 カウンセリング研究センター主催）
<b>Author(s)</b>	五十嵐, 成見
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.25No.1, 2015.9 :41-43
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5413">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5413</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

2015 年度 聖学院大学総合研究所 カウンセリング研究センター 主催  
スピリチュアルケア研究講演会  
「心へのケアといやし〜スピリチュアリティとは〜」 報告



講演者：Alfons Deeken先生（上段左）、開会挨拶：阿久戸光晴先生（上段右）、司会：窪寺俊之先生（下段左）、会場風景（下段右）

2015年4月24日（金）、聖学院大学ヴェリタス館教授会室を会場にして、聖学院大学総合研究所カウンセリング研究センター主催スピリチュアルケア研究講演会「心へのケアといやし〜スピリチュアリティとは〜」が開催された。講演者は、アルフォンス・デーケン先生（Alfons Deeken、上智大学名誉教授）、日本における死生学の第一人者である。デーケン先生は、1932年ドイツに生まれ、1959年にカトリック司祭として来日された。上智大学で30年以上にわたり「死の哲学」を講じてこられた方である。今回の講演は、デーケン先生の円熟した死生学の思想に触れることのできる貴重な機会となった。なお、予約の時点で既に定員数を超えており、直前の申し込みをお断りしなければならぬほどの盛況ぶりであったことを付言しておく。司会は窪寺俊之先生（聖学院大学大学院教授、同大学人間福祉学部こども心理学科学科長）が行い、阿久戸光晴先生（聖学院理事長・院長）が開会の挨拶を行った。以下は、講演の内容の報告である。

## 1. 死を見つめるとき

### A. 死の4つの側面

われわれは通常、「死」といった場合、肉体的限界としての死のみを考える。しかし死は、肉体的な事柄も含めて4つの側面を持っている。

- ①心理的な死（psychological death）〔生きる意欲を失う〕
- ②社会的な死（social death）〔親子関係の希薄・喪失など〕
- ③文化的な死（cultural death）〔伝統的・社会的慣習などからの疎外〕
- ④肉体的な死（biological death）

である。われわれは、死を、一面的なものではなく、多角的な視野から受け止めていかなければならない。20世紀の日本の医学・科学の成果は、④の延命に関して飛躍的な発展を遂げた。しかし、何より重要なのは、①～③の延命・発展であり、これらへの統合的対処が21世紀の医学の喫緊の課題である。

### B. 死への恐怖と不安

われわれは、死への感情として、「恐怖」と「不安」という二つの相を持っている。前者の「恐怖」は、その対象が明確になっているときの表現、対して「不安」は、その対象が不確かなときの表現である。例えば、「痛み」という感覚的に明確な事象を思い起こす時、「恐怖」を抱く。しかしまた、自分のいのちは死後どうになってしまうのか、という回答が定かではないような事柄に対しては「不安」に陥る。

死を想起する際の「恐怖」と「不安」の要素は、主に9つに分類することができる。

- ①苦痛への恐怖（肉体的）
- ②孤独への恐怖（一人で死ぬこと）
- ③不愉快な体験への恐怖（治療の影響で毛髪が抜ける、顔が歪む、など）

- ④家族や社会の負担になることへの恐れ（家族に迷惑をかけたくない）
- ⑤未知なるものを前にしての不安（死は、生きる者にとって誰も経験したことがない出来事）
- ⑥人生に対する不安と結びついた死への不安（受験、就職、結婚、昇進など）
- ⑦人生を不完全なまま終えることへの不安（目的を完遂できない事柄など）
- ⑧自己消滅への不安（自己保存本能に逆らう死の現実）
- ⑨死後の審判や罰に対する不安（因果応報の人生観に付随）

である。⑨のみ特記していえば、因果応報の人生論理に対しては、「赦しの神」を語る神父や牧師という宗教者の存在が、この不安を克服するのに必要である。

### C. 問題 (problem) と神秘 (mystery) の次元

フランスの哲学者G・マルセルは、人生の出来事の対処にあたって、「問題」型と「神秘」型の二つの異なるアプローチの区別が必要であることを説いた。「問題」型は、客観的な事実を考察し、必ず解決策を導き出すことのできる類の出来事でのアプローチであるが、「神秘」型は、人間の実存が問われている出来事の中で、決して科学技術のように客観視することができず、したがって、解決策を提示することが容易にはできない、あるいはゆるされない事柄へのアプローチである。「自由」、「愛」、「生」と「死」の事柄などは後者に属する。現代型のほとんどの教育は前者のアプローチに大きく傾いている。しかし、決して「神秘」型の出来事を、「問題」型に還元し、解決を図ることはできない。

この「神秘」の領域に対する畏敬の念、開かれた態度、謙遜な姿勢が大切である。

## 2. スピリチュアリティとは

スピリチュアリティは、全ての人間が共通し

て持っている生の意味の次元を探求する精神のことである（昨今の「占い」等と関連した日本的「スピリチュアリティ」とは異なる）。あらゆる人間が持っているスピリチュアリティには、人間の生の姿勢に及ぼす10の特質がある。

- ①人生の意味の探求（生きる意味や目的を探求する）
- ②自己決定（自らの人生の道を選択し、決断する）
- ③自己実現、価値観の見直しと再評価（価値観を形成し、またその価値観を見直し、再評価することによって成長する。最後まで創造的に生きる希望を持つ）
- ④人生への挑戦（危機と向き合い、危機を通して成長する）
- ⑤苦しみの意味（不条理の中にあっても不条理を受け入れ、意味を見つけ出して生き抜く）
- ⑥出会い、ゆるしと和解（人間は、他人と強調しながら共に歩み、積極的にこころから出会い、愛することができる。また、お互いにゆるしあい、和解することもできる。赦すことは弱いことではなく、真の強さの証しである）
- ⑦ユーモア感覚（ユーモア感覚を養い、笑顔によって他人とのコミュニケーションをはかることができる。ユーモアと笑いによって愛と思いやりを示す）
- ⑧自分なりの生を全うする（生と死について思索を深め、死に至るまで人間らしく生き、自分自身の死を全うする）
- ⑨死後の永遠の生命への希望（死後の未来への希望を抱く。すべての人は来世に何らかの希望を持っている）
- ⑩人為を超える大いなるものへの畏敬と驚異の念を持ち続けること、

である。特に⑦の「ユーモア感覚」は、死のリアリティの最中にあっても、死の恐れと不安を克服することのできるスピリチュアリティの重要な要素である。デーケン先生の父は、ドイツで反ナチ運動に尽力しており、激動の歴史の中を歩んで

いたが、「人間は笑うことのできる唯一の動物」と語り、家庭の交わりの中で家族を笑わせる努力を惜しまなかった。人間は、希望が失われるような重々しい現実の中に立たされることがしばしばある。しかし、ユーモア感覚によって、そのようなあらゆる希望喪失の状況の中であって笑うことができる。ユーモアとは、「『にもかかわらず』笑う」こと、なのである。

その他、3.「スピリチュアリティケアに携わる人に望ましい基本的な態度」として、①傾聴する姿勢、②個性の尊重、③個々のスピリチュアルニーズへの理解、④自己の限界を認める謙遜な態度、などが挙げられる（紙面の都合上割愛）。

デーケン先生の講演の後、会衆席より幾つかの質疑が出たが一つだけ挙げさせていただく。

「どのようにしたらユーモアを身に着けることができるか？」という質問に対して、デーケン先生は、はじめに「ジョークとユーモアは違う」と切り出された。ジョークは、技術的な笑いで、ハウツーで身に着けることができる類の笑いである。しかし、しばしば人を傷つける笑いでもある。それに対してユーモアとは、「思いやりと愛の表現」としての笑いであって、人を傷つけることがあってはならない。相手の心に寄り添いながら、「言葉」を選んで笑いを誘うセンスがユーモアである、と語られた。ユーモアは、相手の心に寄り添うことによって獲得される共感的なセンスである、ということであろう。

年齢を感じさせることなく、まさにユーモアに満ちた例話を取り入れつつ、自由闊達に語られている姿が印象的であった。ユーモアという言葉がそのまま存在から滲み出ているような、不思議な魅力を持つ偉大なる宣教師の訶咳に接することができたことを心より感謝する。

（文責：五十嵐成見 [いからし・なるみ] 聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科博士後期課程在籍）

（補足：聖学院大学総合研究所NEWSLETTER編集部）